

「魂の夜明け」

(ルカの福音書 15:11～24)

今朝見ますのは、家を出ていった弟の人生についてです。彼は「お父さん、財産のうち私がいただく分を下さい。」と言って分け前をもらったら、幾日もたたないうちに彼は何もかも自分の財産をまとめて、そして遠い国に旅立ってしまったのです。「そして、そこで放蕩して、財産を湯水のように使ってしまった。」のです。彼は彼なりに、心の空しさを満たそうと思って生きていたのだと思いますが、そんな生活で魂が満たされるわけがありません。

そして彼の人生が最後にストンと落ち着いたところが、何と豚小屋でした。そしてそこは、「彼は、豚の食べているいなご豆で腹を満たしたいほどだったが、だれも彼に与えてはくれなかった。」という、凄まじい世界でした。豚には何としても、太ってもらいたい。何故ならば、それによって商品価値があがり、持ち主は金が儲かるからです。すなわちこれは、ギブ・アンド・テイクの世界です。要は自分が儲かるかどうか。それが唯一の基準となっている世界です。

こういう真っ暗な中で、次に実は信じられない光が、彼の心に差し込んだのでした。どんな光が差し込んだのかと言いますと、故郷の父親の豊かさという光です。それと共に、「それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。」という、自分の貧しさについてです。そこで彼は父親の豊かさと自分の貧しさを胸に刻んで、故郷に帰ろうと決心しました。

ところがそんな息子を父親が見つけ、可哀そうに思って抱きしめ、そして贈り物まで与えて祝宴を始めたのです。これが故郷の豊かさです。つまり罪の一切を赦して愛をもって罪を犯した者を迎えるという豊かさです。この魂の夜明けを迎えさせてくださるために、キリストが十字架にかかれたことを覚えて、主に感謝したいと思います。